和久若近道地

発句部

○夫俳諧を和哥の一体なりと爽やかに宣ふを俳諧師
共称し奉り来れる一句の義句ふ君々代を祝し
奉るものとなれハ殊に俳諧某丑の句ふ名乗り
太平を心ふ持ち身上をのゝ[illegible]を[illegible]
元日や我より外ふ鬼[illegible]

十七字を一句とする
[illegible]先代事

○むら〳〵八十九字ハ句多し是ハ旋頭歌とも[illegible]

まへハ万葉集に

みよし野ゝ瀧もとゞろに落る白浪

是ハ旋頭哥にて上の句の如く下の句を同く又七ゝに流て
三十八言の也是ハ歌となる故に人にもかくあるにも作
歌也といふと知る逸し　又帝代軍記と書ぬ詠哥卒
記の中に十七字の句五十九言の句ありて是を号く中哥（ナカラウタ）と
ありて此書ハたゞかゝる事をするにも世上に流布する古事紀乃
中の千歳四十三丁目の表に日本武の命のよみ給ふ御句に古事
記の撰者安丸ありて是等ハ作哥ありとなつかしまつり
続く是を本として作哥と号るや作哥の始とする也八
是より十二代の先神武天皇より定め出る也とも日本

武の命乃御句よく調ひたる故にや

愛（ハシキヤ）し我家（ワギヘ）の方（カタユ）従雲井立来も

此作哥命旅にいましてなを懐しくおもふしのびして
讀玉へる作哥也是風俗よくそのひとなる人に右のぬく
安麿の句の下におれハ作哥也と書玉ひ安麿より今にいたる
千四百年にあまりを歴より十七字の作哥ハ只一句の事の月日
武の崩（カミアガリ）ましくて御歌也しか白ちとりも数く飛去ゆくにもはべる
給ひ子たちも歌ひ玉ふ作哥に

浜ちどり浜ハ行のぬ磯伝ふ

中の句ハ六言なれどもむかしハ四言六言の句ありて作るうと
奉引く七言に合と四言のときハたとへハ読経のうちの声

を引くを重れるひとゝ先古事紀中の巻四十三社の表ふ出る
発句とハ上の人言ばかりふ書れも後世所ふ書とふものゝ記ハ
をかしらふ歪ゆゝ変句出るひ為るゝもを八上代ふ云をふ事
聚集ふ出るゝ服の事ハ續句ゝを家集 八巻目ふ出 今云俗後事話を
いふものハ皆上代より句ありかゝるく古今集より後ハ奇句ゝふもハ
八七百年一六百年ハ代ゝとい出る句を例と今の事話ハ上代より
句ゝれハやゝゝ今までのゝゝゝハ句のさまふ似ッゝ句の綴出さま
ハ殆出ども句ゝかゝゝれと知るゝ〳〵ゝを中ふ

出ゝ一音我ハ方従 雪井立来も

ゝふ句の数ゝ句今ゝゝゝ松ゝれゝゝゝゝゝゝれゝゝを
ゝゝきよゝハよゝをやゝと法ゝのくゝゝゝきやゝゝの句ふ成て出

ゝゝの俳ゝゝ家とハいの句を吹ゝゝる句ゝゝ後とハゝゝれ返ゝ
イゝ俗ゝゝイエヨハ返ゝ音みて上ゝゝ雪井ハ井を付くゝゝや
ゝゝ雲ハ事ゝゝれを縁みゝゝハ為のゝゝゝゝ立ゝる雪も
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれハゝゝ俳ゝるも〳〵古ゝを変ゝゝ
出ゝ雪の家今ハ句ゝんゝ出ふかゝゝん

此條ゝゝる人ゝを始ゝゝゝゝゝの結ふ

ゝゝゝを変ふ出ゝ

白俳句得の事

○中程の俳諧ハ哲句ゝゝ俳ゝゝ俳を求付ゝゝゝ俳ふ得て句ゝ

自前句附に落さる句意立し今蕉門と称する俳諧ハ発句
を主と假に句作する故に兼而題を撰ひ多る句に合諧りて
前句を連歌に書出しき句を附合り私に曰仙を俳諧に垂き
発句を立る事をしてハ自然と俳諧の発句出る人に表きやり
きる句なくも俳をおのつから借まり

蒔ヶ清し添る摘乃花哉

当季にまさるる事

○四季をわかちたるハ発句を作る先なり春ハ春夏ハ夏と定まり
きまりたる中に正月より二月ハ四月まての二月より四月ハ夏

とのまゝにも

茶摘とするハ春　新茶と言へハ夏

新麦とするハ秋　そは刈と言へハ冬

此説四季に季あるを定たる数多なれハ初を賞する此理りを
忘く大概を知るとより行く徒事に仏生会一し又曰夏牡丹を
三月に咲初る蓮末槿ハ六月に咲初て八月に咲終る迄も
夏ハ夏開ある由あるを春とし牡丹ハ暑ける迄を本と定て夏之し
木槿蓮ハ自然と晩夏の花を定むる此花別先哲乃風流
数珠とよ人を季あり彼く格と格なく只句作に仏生会一
よし牡丹に夏季を供ふ寒牡丹の絵なりて一句調さるる
やし丈々中に或人の俳諧に山伏を表ふとし其時人ハ連歌

野山ふみをわけ山伏といひ今山伏と称するものハ修
験の者なれハ何そ歌をみ侍あらんや既ハ今いハ蓬を草の
本様形りとりつゝ書いま歩横を蓬とのみ書きたるハ也
し此類ひいてくもかゝるん物なるふ山伏のこをいひ〳〵乃
事ふよりて歌ふとりあも寡ゐてる侍あらん

○発句ハ頻とかゝるものゝ依て同季ハ其ハ扱ふ雑の段句とりあを神祇名所恋
旅羇遊名追悼ハ数ことを紙を新んぜれハ之ものゝ季節
を加つるハ手附を知しむるゝ乃月之又季節二ツ扱ふ句り
きき所きのゝきを芭蕉雑体とりあ紙きた芭ふ句ゐの大きあ

了御ハ御のこ梅ハ梅のこふく仕ふるを本こと句ゐ〳〵又為を
扱ふ少も吉ハ出〳〵ゐ事ふ雪陸ふ月略ふ夕を詠ゐて事尾
あるこし初為ハ新こしきふなりゐて自然と句紙ふ申ゐ而
ふるかあるものと成ふ所〳〵

何ふ〳〵ふ只西月乃物〳〵ふ
きのふ坐ふ梅の蕾り新
ゐるこ雪あるこ遠くあ葉哉
又月面や吉井の蛙ゐるしゆく
略去るこ虫ふ書数多ゐ郷

○歌とゐるものを上ハ又文字ふおくと下ハ又文字ふ為と法

ゆるかり發ハ

涼しさやほの〻と明る八ツ山

涼しさや鳥居ハ行ク涼シ神

上ハ涼しさやと歌ときハ此涼しさ下の文字ハ

涼シ神と歌白ハ涼しさを綱の主ハれハいまこ涼しさ

ゆゝさふ白菊ゆゝしく咲ける

まハ桑の事

○てゝ音　にの音
をれ音　しれ音

○てゝをとりあつる郵便の事

芭ハつまも白中ゆゝ多く歌くゝの取拳くてゆゝをまとゝふ

○ゆゝ返しの事ハ未子生る

切字ハ事

○切字ハ法花経寺朱まらくゝ

（の蓋ハ近く歌ふる故ふ家ゆ拳

（爲雪問　翁　切ハ盡なり

（支考問　仝　一句ノ聚成シ

（野坡問　仝　一句ノ節シ

（素堂問　翁答　芭蕉翁ル示之
素問　仝　奇し妙し
（脱然問　仝　仮名各切し

答ハ六つ程ありと雖ども三ハ三つし
ばらくと雖ども容易ならず事ハ孫を弱くとうるくハ解し
かたし先切字ハ一句ハ句切し句切の字少くしてを絶ル切字也
いとし事なり孫を八弱ひのやハ浄土ハやと文字ハ二種ハ
へきやを弱ひの句切ハ歯ハ弱ひのやと成を切字とするハ
ハ猶まことにかなし一字ハしを句切と成なれハ切し
事を知ハを用ゆる事ハ実ハ筆ハり潮くみてを草源
を初る

○支今日心詞を発する八理を形り依て切字ハ多くを数多し
中ハ理を事ハ形を事ハ形くハ論ハし是ハ依くハ歯し
切字の習ひとしハ句を去事素を理を事ハ尾しを留ると結ひ
を治字ハ数ハ結ハ二ツハ形ハ又治字を以ハ理を依く極
三理を一ツハ止ると是ハ身まるハ形てハを俗何乃形
ひらあらん又ハ事ハ性を其ハてハ第一句の句を則少張多し

○蕉翁六哲ハ此著ハの解

○蕉ハ是ハ生ハ事ハり

又ゑん少く揚り下へいたる形事

是ゑ去をうけて現生ゑ多為る

又ゑゑん地くさく社花の花

是又現生ゑ素来去りふ

行ふ牛紙行ハ牛ゑる牛 牛

是行ハとうこかしてゑゑゑゑと現生蛇牛ゑ対しいふ

○奇之妙之

仮名各切之

是おゑをハゑふゑゑまてゑ雪の里

是西ゑ雪りゑる切字かくて幾句と仕まり是ゑ立て除なり

雪のくの字連奇妙格字ゑ對ゑ雪のとのくゑさゑるゑふいふ

あるきこるし必行動ゑるハ仮名四十七字何まゑくも同し

元ゑり一句現生形り

○盡之　一句の妙ゑり

さりゑくハ人も森さ生れ火とり虫

ゑくゑ現生の主ゑ形十七字ふいれ重して成就ゑる句ふ

格くハ句切切字妙為るし硯ふ不の如ハ不切とりふハを社字ふ

ゑふ教之武句人も森さ生れゑをしく句ゑ形ゑ雖ま

き正しく是ゑくゑ時居ゑくゑ又曰

元日や表の淋しさ素常ゑれ

化し蹄のあくゑる蘭(キツコ)之しゑるふ

世や代呼出しのやうなり此外を称美歎息あるいは是
現在より事ふる所なくして人の句はとかく論じ為すなり
中ふ世哉ふと抑る面うしろ只表の体しさも常なるなれ
日又化して世くなるなる箇之しるとやもかも一句乃
即仮なり
切字は本源歩行只現在を元として格字と成玉又一句成就乃
ふ字脚を多る示此三字を含得する為て八語つ事なし格句
紙引合は乃ちれくの句格を契子記ス

発句平句の差別

○平句ふ切字扱なる句
発句ふ切字なる紀あり
此句は発句ふ切字扱なく発句あるりなるとなしも
句り又切字なくして自然ふ発句と供りなるを初て求て切字
を入る句なり

○切字発は中ふ千句ふ一句はなるといふを依て初心これを学ぶを
急きなくきなくふ一句なりとも免ふ(きや)是句紙の紙きの少なり
まくて一意あるく学属せなるハ押ハ抱ハの字まて廣く義句なる意
是句を紙ちんなる所ふ硬ふ蕉翁仮名四十七字ハ皆切字なりと
言なきなり

○異体の句格をしるしたる歌のいてもまた俳諧歌の名をもとるに求るに字を餘したるハ十八十九の多きなと求るもあり
句面異体ハ絶句多しハとて悪き歌句能句多ハ多くハ
只通用の切ハ十七云ハ句多くハ

○句切大槩句得ることを事

何〳〵と過ぎるる句　上又文字ハ云ふる物を置句
一句現在ハ留ぬる句　切字をいひのこしたる句
初を句を持ふ句
ハ又ツ何是ハ作字の切と句〳〵ることくいを條〳〵ハ

○句中ハ願下知のことを句ハ
是歌下知ハ未来形ハ終を現在ハ
句切ハ句ハ形を一句ハ
ハ句叶〳〵ハ火ハ虫

○下知　ヘヨレソ子ナケテメセ

ヘ　ふくえ
レ　ちるき雪
子　花ハ切ケ糸
ケ　ふけあ
ヨ　忘ハよ
ソ　ひかりそ
ナ　義かな邦
テ　ちそまて

メ霧あ山　　セ　ちゝせ月

○ちゝ世の詞次第を

風ちゝむハ　　風いつゝき也
雨降ちゝ世ハ　　雨晴ちゝ也
人をちゝむハ　　人を放ち也
留すさむ也　　形くさむ也

○やハかハ先や　北三ツを表裏ふ南ちゝ世ふ

連所
ちゝ形ちをおしまもやハ　おしまちゝ
今
降ちゝ紀迚をやまんもれこのハ　やめまんりのハシ
今
よしほちゝ世おもひ於そや　於ましきこ

○そゝよ　あふ　いつ　いゝ　いく

ちゝて張ひハ前字ふゝ抑ゝ(ち)ハ清定ふ多る

ゝち身そと　山ゝ降ゝと　ふ多ちゝよと

○ゝ沙留　ゝを多ふゝ　ウクスツムルシ

右の字をゝ世ゝ(ふ)ふ歪て身ちゝ多ゝ世ゝ(ふ)ハゝ世ゝの上字

ゝが世二字をゝして吟し多ゝ也

第ゝ川ゝちゝ　年ちゝふゝ世

又ゝ世ゝ世下ハ何ゝ多ゝ詞續くゝ世ふ百多

やの字は事

○まてやの字は五八切と云へども多し色白糸ありく
多切を示すよりても切まを

菊乃や　押へ落ちるや　狩や　それや　のや

仕合のや　こうもるや　中のや　ちさみのや

此分切なるゆえ依て句作なり

○狩や　色十六文字一句の影りに絶て下糸蛍加狩やなり
玉成や上又文字は来ル事を七文字は来ル事を

月ごとハ月新なるゆえ乃夜や

又上又文字は来ル事をのやとなるを又ちやとなるを此事

ハやの字は糸ル生ル

○中のや　大体上より八九字目なり

衣搗ゆえや　旅　森乃　搗ゆ

前對とゝ初は中ゆを迎へ中のやを来ましてちさみのやは
いつ一句の切を衣搗の下ゆり点一名とのやとなるゆ彼と見やと
ふとの字ゆ重ゆやと

○新のや

之ゆ切を依ゆ句中ゆとの字は押へ切ハ字ゆ
雪は雪ちゆハ花やと志ゆ来て

○角のや　上より四字目まで行り涼しやとらふやうの影や
不切芝やの字をゆるめてその字ふくゝ押へうるふ押へ
字すやうとりふ此句切意詠のやうにあらしとは字を除て切し

○口合乃や　上より三字目みを月や花やの影し切也

一句ふや哉抜ふ事

○都て哉抜の上ふ重や抜やハ抜ふしてそふハとは字ふ無ふ
やふ抜ふるとふ法へし

蕉翁の句ふ
夕顔や秋ハいろ〳〵は孤うる

此句ゆふ夕顔ハ秋いろ〳〵の孤ふといふ句ふ芝抜やし
化し蹄やさも拍き風ふ　芝うな
此句化し蹄ハとさ〳〵ハ平句ふなるうるふ

○冬一所のや　ふとらふ　三芳野や　位よしやの影し
此やをの字ふ重ふやとらふ然ふも十句ふ一句ハ中うるれを
用ふ〳〵そふをさる事ふ成ふ前の句若ふ中ふ抜ふ化
し蹄のさもるる紀ふ芝ふとらてハ一句のをふるうるとし
依てをものとも重ふとふ抜へし

哉の事

○古素哉の扱ハ現在俗字ハ白切ハ亞を加ハ哉

古人の句 蕉翁 墨けしこのきさを乃 林の松

是を俗句とハ云ハ之より一句昭和ハ有ハ書ハ出ル

書ハ哉ハ函ハ遠ハ哉ハ一度ハ

ハ哉ハ又ハ称英称嘆の文字ハ云ハ慕ハ

白ハの松又ハ哉の字を添ハ有ハ哉と開句ハ松ハ

熱ハ句の上ハ編ハ句ハ有ハ限ハ是習ハ

接ハ中ハ哉ハ中ハ哉ハ奇ハ上の句ハ

ハ哉ハ後の句を呼出の義ハ

○カナ切反ニ力之加ハ哉ハ疑ひハ限ハ

力ノ字亞ハ哉ハ疑ハ

花のくらさ松ハ去ハ山遠ハ

又曰疑ひの哉蕉翁の句ハ

神年ハ松の剃ハ

是一句疑ひハ

のさハ句ハ切ハ去ハ形ハ

松ハ剃ハ現在ハ

又蕉翁の句ハ 用の身ハ竹斎ハ

是一句現在ハ

タルハ俗ハ哉ハ

古人もルカナハ新しとて の新ハ又ゆる新ハうゆる
ゆゑ又宮子新 宮キ新 宮タ新 イキタ ゆゑハいう
ゆゑ宮を不留依て宮宮 宮宮 載て注宮 現宮
初段を下ゆ開段の宮さ新
元新の名ゆ新法 ルカナの二字ゆ宮 宮 ゆ新法ゆ
金得せされハ兵法宮現宮ゆ扱ひ弟ゆ宮宮

○モカナ ガモナ 何為豊新の詞ゆ用る 武出生ゆ一字ゆ
宮ゆ受ハよゆ ゆゆ 為ゆ受ハよひゆ新り

○ゆを 新ひゆ

名月や 雲ハ裏かゆ宮なゆてかも

○ゆ ゆ字
新のゆ ゆゆ ゆゆ の類なり
牧ゆ 異流しゆ 表宮しゆ の新ゆ
てゆはのゆ 前ゆ記ス

○ての字 義ゆ用ゆる ハ弟三ゆ記ス
又上又文字の末ゆ宮ハ下初中 上文字の末ゆ宮ハ下又
ゆ字ゆ用ゆる ゆの銭盃ハ切ゆ
生涯ゆ酒のゆ宮て宮 念佛

○て留の經句

芝そうくより十字目を左手にて押へ置し

生そくちんすれ赤そのうりて

○みそくぬ　をそもうくぬ

此字を重くふてとゝまる　芝を抱へる手ぶとちが

世れ中乃蜂を見おろす住家かな

又曰生き身のふくゝ哀なり

閑りみて　通りふくゝ　一次ふくゝ　遠ふ事

○ふ爰經句　芝書句ハ第三ふ歩より

七文字くゝの末ふにを置り法なり

連奇

波ハ　紬　子　霧　を　蒙　子

爰ハもとをふ波ハ紬ふ之　芝一句ふ尾して耳ふ立ちる　ゆゑ子

紙句ときゝ芝を思さして貴屋する時ハ芝花ふ頭を持く

ゆ子　仕もりゝ初俳を出しふ

まとくれ世と仏ふ持くるや

○仕留　芝書句ふ爰ふ經句ハ爰子川玉ハ爰る之

又一説みハくゝ爰ふ二ツ玉ふくるもの

石髪ゴ　ゆくふ　蕃れぬまゝ川りくきゝ川

○仕くふ長句　上こや　中こと　ゆり　ゆり　の字を置て

ゆくの字の押へを置て爰し

連文白み
義ハ古ヘ義ヲ形ラレテ
強ヒテ用ハ一切不用ヒヲ

○佐〻爰紐白

帆下ル毛蓼ホ紬 震ひ佐ヽ

佐〻の事 古来諸説区〻形ラレトモ大抵濡佐ハ濡〻て
と白ひ紬度ひ佐ハ紬おひひ〻と白み持〻佐と爰る時
ハ遣ヲ〻〻型

○不の奴 丑斉 雪緣て白ひ〻ハ見ぬ毛の山
今
早奴 雪沙〻毛あ〻ハ見ぬ毛ヶ山

ふの奴 風ハ見ぬ〻〻不切
ぬ〻〻切〻 早奴ハ風ハ見ぬ〻之るの字と合ス

○遣去 不切 渡去 切レ之 未来 不切

三世ヶ差別

毛ホ白ひ白ヲ去ハ今〻ホ扱〻毛形ホ白ヲ去ハ依て一白
の切ヲ去〻〻又未来ハ今〻り未を いあり風ホ扱ホ〻現ヲ去ホ
ヲ〻白〻白ひ白ヲ去〻〻

○三世ヶ〻〻

過去　ニ　ミタ　聞　キイタ　いひし　イフタ
咲し　サイタ　ちる　チツタ　降し　フリタ
現在　き　キ　近し　キ　白し　キ
ら　キ　きし　キ　うし　キ
未来　まじ　べし
ばきもへきみ見ふ恵し　現生るる所切こ
きゝじ　ゑハ　ハじ　いんじ
此河ハ濁るも　濁生なる所ふ切こ
月し　花し　時し
此歌の体言ハ　すべて御ふし　又いつしらハいけるこし　体言え

項し　をし　ハ　涼し　をしこ
体のし　文字を仏ふ持ふ加ふ切こ

○三世のらん
過去　いけのるふ山の雪ハ消ぬらん
見い作と結ひ〳〵外山の花ハ散りぬる　早ぬふて現生ふ為ル
現生　いるれハ新と人をなるらん
さし出らんとふ見ゑ武人をなるふと持定られハ現生こ
未来　いつとう新あらしる所ふるらん
あらしふるれるふ〳〵作定さする所我あると　現生ふ為ル

○かな留らん　昔哉へハ何事とも今ハ不用とし
発句　哉そしき哉らんをよく白ふらん
○けむハ　過去　事也ハ　現在　せんハ　未来
然ともさうなんも段々に疑ひにも通ふ　過去ハ
草ハ萌なんハ　是へぬるなく　現在なり
まよせ侍らなんハ　何とも知して侍る事へと疑ひなる之
○な留詞　えん　留ん　えん　せん　らん
何事も未来なる詞ニ不用也在一字なるの時ともハ　現在
ニ留りなるをいふ格ハ六拾く　其の外なる

ケラシ留　ケラジの反し　ケリ　ケリ反シ　キ之
○ケリ留　出生キノ一字之　何事も過去之
キ　留
　銅猿の気とり売なり枇杷の実
又なり留ハ七文字の末をテニ下にて押ヘ又なりの訳に
にの字をも連てなりと留へし然事も自然と現在にて
危し留ニおいてハ論なし
　能都乃咲ずと咲てなれになり
　風のいつもなしに止ミになり
○タル　テアルノ　テアの返し　タノ　過去之
古人の句に
花にハ又出をほめる雪間哉

此白玉の多くを参る社ことに依て現重なりタルを家本
扱ひ[illegible]ハ古人もなやまされ悩て多くを数かさりあ
[illegible]へし

○タリ　西去ル

弟ふりかたとく西去ふ白切て現重なるハ勿論あり
是て屋ハ窓へもきくさり初代白
此くりタリふあ[illegible]窓へも来れりこ来れりくも何
のうりく切あれと来一白のあ[illegible]へかさやりあくるあ[illegible]

○その字　ウクスツヌフムユルウ

此青あく多る絵まあ[illegible]ウの字ハ都く鼠青ひれハ高
又上りのくりあくキの字まあ[illegible]又ましても留ルあり

ク　秋風をあく　ス　涼しさそまん
ツ　夕雾そくりあ　ヌ　爰ふそくぬ
フ　人ありそ[illegible]ム　風を明ふしむ
ユ　身をそかあゆ　ル　独そぬきある
キ　人を恋しき　ま　筆をかきくん

右長白中中文字あくも同し

そと押へ[illegible]ハ皆むの字あり

○ちその例　エケセテヲヘメエレエ

片かなの中ハエとなりまるり青夜あり

ケ　月みくこそゆゑ　せ　筑しなくさせ

テ　月をさそきまて　子　爰こそハるゝ

へ　おをしなべ　ノ　光しなとうみめ

レ　夜こなを更ぬき

片かな中七文字ゆくも同し

すへてその字又ハ其ハとの字ゆく押へまハ其生ゆ留る

又ハ其ハ色の字ゆく持合されハ家く留る也

源氏物語ハ御しなせハしくれ

破ら家ハ数ゆしをこなを行しら程

和しく程をれあり

○とけ字の切

片おゆあらりていの詞こゆるゆとゆるゆ此と乃歌

さくハさやうなるもの也

扇かさぬ里ゆうゆ乃立

○とけ字の切

蕪の古くをゆゆ　蝶　拂

盗人の紙ハくれと　紙衾

何をも乃押へて下又文字を借うる物を重ねる也

○何くれと送りくるる白
　祝の人まで麻久るかさか明る者
　色葉を始くれ申候て詞を送りても海苔の切
○十六夕方薬の白
　いましハ猿もさぞ世間ある
　猿もと語りくるる人くも北らん海
○十八夕方薬　色切字を云のこと白之
　一条ゑゑゑ切と云
　風かくハい法を事的ゑ猪月
　おおろ自そて添くく聞白之式白いけを意的そ猪月とし
　てハ考くく稿ゑくるが加也
　ゑ　本立今てくさる底根乃草
　熟てと又文字ゑ郭之牡若等ゑ又文字ゑ云法くる ゑを
　垂て法字の切くるを又文字の下ゑハ家くやの字供くる加
○十九夕方薬の白
　垂を共くく支も危き家乃玉
　家の玉きりとゑる白也
○字解り
　紙燭きりて足ハ聞くをきりくす

光朝ぬきりくるまりとりあるなとよみてと給せし
ハきりと聞とのあるもの

○もゝ絲後句　一名しもやのてみとりあ

光切字三ツをきりあ上又文字ハ紀生のし盃中七文字
みそのもゝ中のもゝのうちを盃本をもゝ移るも

定近し今夜を月のもゝ能もゝん

切字三ツをもゝ一句の切ハ紀生のし始り二ツハ一句乃
月始り光ハ大事をなり二ツ用ハ立てる扱の句を
もゝ長をもゝ又三字切発句二字切後句とりあを切扱と因し

迴しもゝ和歌

○迴しもゝ返してみとりあ

久方の雲井ハ本ハ悔ハなし紀生のを
何をしみくも上又ハ中七文字へ出るをりハ又曰切句乃
後ろをの字切とりあを紀ををの字ハ下ハやの字を云
のうをハ悔しおりて草ハ本ハ悔ハなし紀生のをやいうて
義をとうをもとうもるをりあり

○大迴しし

此雪は京まてたもく蓑と笠

京まて来ぬらく此雲の義と言
義ハ此京をたとへて此雲は
此所何事へも来ぬる事にて何句も有
ある人て冷る竹のを植こ乃
然かも也しの言葉なくも句を続て此尾に聞句なり
涼しさや此風に放るとも
此雨に放るとも漂ととも云いふ句也

三段切の事

○都て上下の五文字を置中の七文字に動く所を置也

庭ハ且秋ハ奥音す　雲乃寺
是一段し[illegible]切とはいはく三句ともちる也
又奈堂藻倉なく
月にハ春ハ其山なとゝきれを行離
とりふを続句と修る故に又七文字なを文字なく続くをいふ
是ハしまよしと中に限く修まる三段切の句に
花ハ紅　柳ハ緑を　時津風
又月雨ハ山路の松風　谷乃水

○
夫又地又といふを
是此字にもむく字といふを

何事も押迫しまれハ日しまれ我也ハ中しの事ハ句作はまらひ
ちらハ故不記是を紙に今日は河のふく扱ふたやまちかしー

○名所の句格

三芳野や雪ちらさの限りなる
岩山
花は山霞を分る一あしし
哉
志ゝ山や雪のうちとも揺き郭
伊勢白子
死もやしゝ秋大悲は揺ふ絵河手

○祝詞　贈儀　卜居　別髮　留別
送別　追善　追悼　懐舊

右等の心の所をしー句格ハ諸書に物ふ略ま

○寿句は句得ていり
又十賀　六十賀　七十歳　八十八歳　丈く差別著無ー
又作ハ祝ふる賀ハ支より事を書く重ー
又十歳の賀
人文ハ仏の花を又十より
八十八歳の賀
ゆゝしくやいゝ歳ても吉乃山
自句又十賀秋ふる
乳今年ハ吉は吉ふ月ふ

○年忌の事

是又一周二ヶ周三周なる八又十年百年まれくの
差別なる也

又逢ふ人の迎ひ来る事も有るべき日紀ハ
まれなる人に対ふべきか

世間まれなる白を生まれ
まれなる色ひろ人なれバ

いかゞ皆生帰りなく〳〵ゆく身哉

又の三十三年を忌ふ無元白を生まれる
花守の公契ゆくゝ紀忌日哉

伊丹鬼貫又十回忌

又十 雀 生まれ先ハ生れ有りきゝん

かへしの事

○いろはも文字ハ二字づゝ今日据ふる言葉のうちかへし皆
字を用ひ来りしも此いまだかへさゞる仮ニ用ひ来る
を知り先ず柳(アヲヤギ)ハアヲヤナキをかへし読る詞よりてア
ヲヤキと読なるよしハもとや仮名をまへて文字取り文と
えしえとかへしえるハえしてなる本字言葉と知るべし

竪留末字 ニ 一

横歸本行 ニ 一

アイウエヲ
カキクケコ
サシスセソ
タチツテト
ナニヌ子ノ
ハヒフヘホ
マミムメモ
ヤイユエヨ
ラリルレロ
ワイウヱオ

横の返し方
タレの返しテニ
タ テ レ

竪の返し方
カキの返しキニ
カ——キ

ニナの返しナニ
ナ——ニ

○ナムアミタブツ　ナマミタブツ　ムアの反ーマミ　ブツの反ーブミ

○又ハイタ　ナイタ　又ハの反ーナミ

○ノタマハク　ノタマフ　ハクの反ーフミ

○サヘキル　セク　サヘの反ーセミ　キルノ反ークミ

○アリク　イク　アリの反ーイミ

○詞の事

支ラリルレロは又音ならしそ詞とする故ふ字ハ物體用令助の文字なるは是を續り合を始りふ於くハ千爲參量は何と始るとり〳〵と考ふ始文ツよりあると知るべし

初　ショ　參ラン
體　タイ　參リ
用　ヨウク　參ル
令　ゲシ　參レ
助　タスケ　參ロ

元白氏の聊斎志異を新おもしろ弟子の
摘右示出るを白くまたを白格を知しめ
ゆるを合せ一時白をおせしめ九八白はよし
白しを仙をを先給の想らるる

角鹿齋

一蘭

北くは近屋下の絵

萬家
素文藏